

令和元年度「第46回大山健康財団賞」

(敬称略)

【受賞者】 かのう しげゆき
狩野 繁之 国立研究開発法人国立国際医療研究センター(NCGM)研究所
熱帯医学・マラリア研究部
部長
医師 医学博士 (満60歳)

【業績内容】

狩野繁之氏は、国立国際医療研究センター(NCGM)の研究者として、アジア太平洋地域の発展途上の国々で、長年マラリア対策の医療協力に尽力されました。

狩野氏が群馬大学からNCGMの研究部長に異動した1998年、橋本龍太郎首相(当時)が「国際寄生虫対策」をG8サミットで提唱したことを受け、JICA事業、いわゆる「橋本イニシアチブ」が始まることとなり、狩野氏は竹内勤慶應義塾大学医学部教授(当時)と共にそのプロジェクトをタイ・マヒドン大学で立ち上げ、学校保健を基盤としたマラリア対策に5年間にわたりJICA短期専門家として関与し、着実な成果をあげられました。

その後も、マヒドン大学医学部(FTMMU)とのマラリア対策に係る共同研究を客員教授として続け、NCGMとFTMMUの包括的共同研究協定(MoU)締結にいたるなどの業績もあげられ、橋本元総理が2003年に授与されて以来の「名誉博士号(熱帯医学)」を2018年に授与されています。

また、フィリピンやソロモン諸島国の最も開発の遅れた島々では、マラリア診断・治療のサービスデリバリーが、辺境に住む貧しい人びとに届くような「ヘルスシステム強化」に尽力され、フィリピンパラワン島でShell(石油会社)と組んでGlobal Fundの獲得に成功され、ソロモンではJICAのODAプロジェクトの下で、それぞれ20年余りにわたって協働し、このマラリアのUniversal Health Coverage(UHC)の2030年の達成を両国の目標とされ、2018年にはフィリピン大学とNCGMはMoUを結び、客員教授として学生教育に当たりながら、若い人材育成にも尽力されています。

2014年からはJICAとAMED(国立研究開発法人日本医療研究開発機構)が共同で実施するラオス人民民主共和国の「地球規模課題対応国際科学技術協力(SATREPS)」プロジェクトに、プロジェクト代表として関わり、薬剤(アルテミシニン)耐性マラリアの出現と拡散に関する質の高い研究成果を創出し、エビデンスに立脚したラオス政府のマラリア政策立案に大きく貢献され、同プロジェクトはラオスで我が国のODA事業の著しい成果を創出したとして高い評価を受けています。

狩野氏は、ラオス国立パスツール研究所だけでなく、世界パスツール研究ネットワークとのMoU締結も2018年に先導し、広く世界の発展途上国のマラリア対策に資する研究基盤を形成されました。

さらには、2017年からGlobal Fundのマラリア技術審査委員会(Technical Review Panel)委員に(日本政府から推薦され)選ばれ、マラリアの流行するアジア・太平洋地域の発展途上国からGlobal Fundに提出されたコンセプト・ノート(申請書)を審査し、支援案件の推薦を行うなど、世界のマラリア対策の最先端の現場で極めて顕著な働きをされています。

国内にあっては、一般社団法人日本熱帯医学会の理事長を2020年まで延べ9年務めて学術の発展に貢献するばかりでなく、認定NPO法人マラリア・ノーモア・ジャパンの理事として市民社会でのアウトリーチ活動も展開されるなど、あらゆる角度からマラリア対策への貪欲な活動を行われています。